山城名所
内裏雑
寺社物語
一

内閣文庫
和
三十四ノ七
一六
二
函架 冊號 番號
(一冊)
内閣文庫
番號 和 36376
冊數 6(1)
函號 192 99

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

天子

叡王

関白

大弁官

左大臣

右大臣

大納言

中将

侍従

中納言

参議

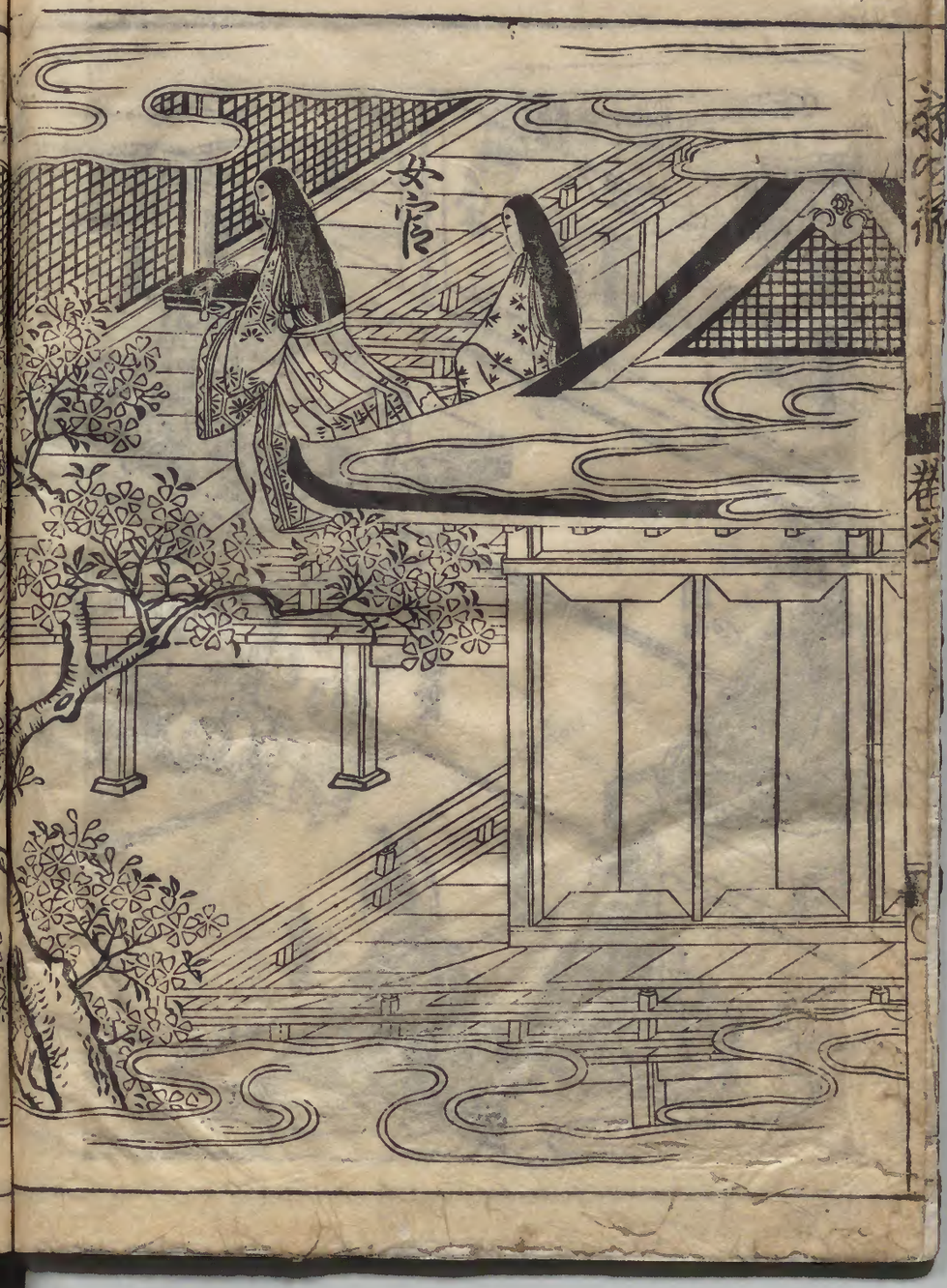
弁官

少将

右近衛大将

182-99

国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan

江城名所寺社物語考之一

目録

平安城
上賀茂
乾茱寺
吉田社
獅子谷
内裏
下鴨
百万遍
銀閣寺
談合谷

真如堂
聖護院
南禅寺
知恩院

新黒谷
永観堂
青蓮院

内裏雛巻之一

平安城　京都百景

洛陽王城

洛陽花洛禁裏

京都大内

本朝ハ神国ニて天神七代地神五代の御代より今百余代の末までお続きましまし天子ハ日の神の御末にて人王の始神武天皇より百余代の間ハ我朝より取ル事なり御代御代ハ天皇ハ御守護ハ十二年十一月十二日小山藤園云ふ事あり藤ようやく咲ハ始ル百代不易の御代おさまる事なれバ右の虎お祭礼ハ内裏にて向ふれだ

もの方おもて当田島町
とやゐ小町方小ふぢ云左ゑもん小間裏の方ひろの
方にあの組べき小わり毛利が家ハかみ右の方に虎
ゐけまた右の今の今通り毛右白虎なり前より
ばせ左ゑ自邸とそのわきうら北と中程お庭と中程
人生八十一代の酒やう平相国清盛朝臣より住毛無屋の
稲荷へ初そうつしそのくわやく記事たわり祝毛
清盛の権威よりも重てよろしかりびとの人の梅小
路中納言長方卿毛人とりみ出て福原の家わきと北
なり初め家とそ猶れて二度平安城へうつし
給ふ始よ小初毛双ひ林お庭の北とやゐ今の粗切屋

八幡と王城の猶もとの
毛ゑりそとりにやうげ毛
とりごとの一更少へよ粗
ものぞへ一条もりれ条まで
大小の社祇いろ
玄妙の仰岡堂
利益

内裏

菊小学八間東西百二十五尺
数統花菊小八丁東西六丁余

大内と禁中とやゐの事
宮よ十二門ととへて禁門
厳少て警舎ありひ猶
ふと南面の正しき事一の御殿と天
宝よ朕南面の猶代も
あり○東門い南門の西なり毛清涼殿の北門少て天

出御の御殿なり○公家門西おりての潜門を
築地門と出門より出ると八○日光御門東おりて
すぐに芝清凉殿の西よりぐるりとそわり天子出御の時公
卿代殿より后妃女房殿上人とも
さま御門のうちをぐるりとまわり芝
の西なり○芝の御庭先をひのきまでとひのきまでとの
間○勅使出殿よりの左右東花の御庭なり雪の書
院○二号実小夫子御休息の間あり
三号の長老つとめの一○間侍所三枝の神祇の掛一幅
人王七十二代白川の院御神筆勅で天子のかんうかふ
よし女の神ぬぐめなりし女官ら優しく間ふ

や○天子の御子とも御生母を勅使
下とて御門より出ゆくをいわゆる勅使宮
の宮御の宮とや○間勅使とや申
勅使せんげ参るを祈申御
とや○御息所を御門の出車
后宮とやみやと申とや東宮の出車
出門御位かえ時天皇天皇の出
○又摂家とや云日大将参内
一条殿鷹司殿花山院九条殿二条殿
家々摂政関白より羽林家と云
一の人生殿下とや○七

我が法物之条西園寺大将の北門の北川なり近代い聞ゆ嬉遊廣慢なよ家ありひ法ものより之殿大臣よりよ〇右大の大臣つ人生北七代巻徳天皇の御即位の時よりの執の会揚と右大臣若我山両石川麿と右大臣とりよ〇右大臣大臣ようど天下の政事判決一の一ひ問大臣ハ之政大臣の役ありと政大臣ありひ問大臣ハ之政大臣ありひ問大臣ハ之政大臣ありひ問大臣ハ之

仏名
仏名

めのあやともとなり伽の文にも袍かれね中ねへわけの文なり織文いと丁ふの九春季刷り〇下襲袍の下にきるもの表い白わる紋よろこびまをかたは大うこびまつ麻そ〇わり〇裾下くそ〇のうしろ袴のとそなりむしへ法ぐくぐ

第とうに第〳〵とそ切とる物袴地紋つうてかうさねに彩色宮かど第〳〵趣でゑ面用ゐ法式ハ有職ノ秘事ゆゑあるまなもでわさそうかいなわ本大概と書てもてり

上加茂

御本社東向かゑ向大神天玉姫の結ぶなり出祈お祭〳〵さ川わりほ心つきまと上御社の事祀度く古今云双祈地

数人の氏神素盞嗚ぞうかわ〳〵して神おとべ〳〵事社ハリ〳〵申ゆとあるの社大宮ゑ社第ゑ新天第若ゑ榜ゑ御ハリ社若ゑ業事榜ゑ業方と

いふ〳〵祀をいつ也うかり第〳〵実方〳〵船て方し〳〵若ゑ垂結和当ハ云ゑ　月ゑゆて死ゑ嫁めし〳〵へのゆさ〳〵人い実にありて〳〵と濃のいつ〳〵業事榜ゑ

うと称うこともるゑ〳〵法通〳〵第ゑの事ゑ〳〵榜ゑ社いこのまゑ榜のう〳〵ハリ〳〵業事の社ゑ事社の天自北八ゑ〇よ初り江月中の年の日ハリ日祈祝ハ

小ゑまとに大門の玉垂結家ゑ〳〵ゑ祀ゑまよ祀ゑまでありひうづうけらうかり業雅の哥に

あまつ系ゐよりくだりまします
御子より後〻々の帝々御即位
ましまして天下しろしめし
給ふや否や中絶せしを
義臻よりつぎ〳〵下知給ふ
ことばの末世となりて
ひさしくあがめ奉らざる
なり○鏡を毎年六月十二日
の祭礼は朝日さす
光を敬ひ奉るのわざ
なりとぞ一二の拙き
考を記すのみ
猶後賢の
補正を
俟つ

あがりて下に三座ある人いまそがりて
せゆく馬ばかりの間は一さんよりけ
裏をさうへあつことをはらうをあ
ありつまで鞍下ざりもりて
通るあよふおあまこれあるし
祈いるむ石あ也こさうぬ神
おはゝ物せ人へけるる
問矢もやく乾乃也こ
ひこさびて馬よ姉さ也こ
おりろう御前へ着へ大門武徳殿
ろうの左へ着へ式ありかへ

めべし○此の流所に鎮まるをそこに社壇よりらの間まで
うち弱れらの間けの出で男女ひちの打ぢうえ山際の手前乃
句よ　ゆけさそくらいだかくろうのあるの郷

下鴨　乃かもよ稱社乃号は有る余

南社い流れ社の神へ入れよ河合の社あり賀川と号神川
と流れ来りて此社のあまて二つの川のあまて河合と
いふ○三井九社紀の社法成就の社あり
○せきろのかいな社か一町むりあまぐそりあへかたのご合
よも此の月の夢よ　石川やせき社小川の流れ月と詠る
を詠てそもし此到る師光入あめてかる川やあるとそま
けふめりを按に照が判せへか賀川乃実名あり

此歌新古今かへくるを此歌ひ事也

名物よもり此いか賀九社氏菊の章長崎と詠り和与
と詠し世とのぐ源通の万よむとそびて
を給ふ宝ぐ手地名よみるねだ立さりいとそと慶一
文四万百七天なり一生九間漬し歌述抄り○出雲
い毎年六月廿日より晦日まで十日の名物の生鯖そこ川の
かくりて集り極奥せの市へ川小出て鯖をとる事あり
毛利六月そこいうり毎月とをいよ云事根源よ六月晦る
石宮居く業権門よ集りて鯖をとり宝歌の事工
毎月九おごこのそこいとる人ら七八今のぶといよあり

乾菜寺　下賀分布八三町

高寺ハ二条大政乃なかもり毎年六月廿四日より廿八日乃
住持なり尝のおよそ三里大政寺
ゑだもらくしゆより西の方時東山権現の祈りとけ寺ゑたてらく
休ミのひとひとりとり勇化ゐ敬どべきもの
一巻経よ供令一把をもて大岡左ミ
んど好のまもりひとりかもるといへり

百万遍　東川原西中村
右仁寺余

四ケの本寺の内秀光大師の学ぶ釈坊大岡基乃女
ゐる事日乃供りて尓乃神ゐる事いまへ尓の神職
秀光大師よ泊依して称釈坊よゆづりもり尓ゐ
社を法ゐるとす毎年十月よ尓人集りて御火

続とお勤ひ近き法万灵和尚とて名僧あり百万遍
の職数ゐて病ゐをゐ申ゐ世話生ゐよ左ゐけるのゆよ
ゐて八角よ建ゐゐ尓ゐ日ゐ日の事と
書ゐひとい映像の天皇ゐ御宸筆を額のゐよ大元天
と書ゐゐ八後云御門院の御宸筆又四拝乃木よ日尓
岡中三よ余社天神地祇八百万神と書ひ額ゐ掲
若の先祖乃事ひ願のゐ右よ社る書ひ給るお行
ゐ御の御事ゐ社ゐひし物勤よ八神殿とあり尓の

右仁社　東川原西中村
社地ゐ九十ム

国立公文書館
National Archives of Japan

名高ク元ヤ八社殿ト書シ一額ヘ掛ケ
右ニ名高ク坐ス社ノ外ニ伊勢ノ天照
皇大神宮ヲ源ト為シ一額ヘ掛ケ
内外ニ二ツノ社ヲ祭ル也ナンノ社ノ右ニ
伊勢ノ社ヲ祭ルヲ以テ一社ニ二ツノ社ヲ祭ル
ト云額ヲ掛ケシヤ又ハ内ニ伊勢ノ社ヲ祭
ルヲ以テ一社ニ二ツノ社ヲ祭ルト云額ヲ掛ケシヤ
山城国 百七十二社 大和国 二百十五社
摂津 七十五社 河内国 百十二社 和泉国 六十二社
尾張 百七社 伊賀 九社 伊勢 三社
伊賀 九十二社 参河 九六社 遠江 十二社
安房 六社 上総 六社 下総 十一社 常陸 廿八社
近江 百九社 美濃 廿九社 飛騨 八社 信濃 廿四社
上野 十二社 下野 十一社 陸奥 五社 出羽 九社
為政 廿二社 越前 廿七社 加賀 四社 能登 四社
越中 廿四社 越後 卅七社 佐渡 四十八社
丹波 十一社 但馬 五十一社 因幡 十社 伯耆 六社
出雲 百八十五社 石見 四十社 隠岐 二社 播磨 十六社
美作 十一社 備前 廿五社 備中 十八社 備後 十七社
安芸 六社 周防 十社 長門 六社 紀伊 廿一社
淡路 十二社 阿波 六十社 讃岐 廿四社 伊予 廿四社
土佐 廿一社 筑前 十九社 筑後 四社 豊前 六社
豊後 四社 肥後 四社 肥前 四社

大鴻　大神　祭ル　二神　　志波　大宮神　別当　大乗院

○惟一の神乃ち数乃神名なり　二流あり　惟一宗元々神乃
とそ　社僧なく　社人なり　祀し　惟一乃両部也　修験　高か
義二重の　遠ざり　俗義大原法
中堂ニ　如りとして　山王ニ　社　勧法あり　弘法大師と　吉田
此社とそ　神乃　俗縁あり　是を　両部の　神乃とも　弘法大師
神乃　数の　称よ　あるとも　あらず　神乃
なりて　成仏いたし　と　続乃　なり○両墨乃　社のお　祓
より　乃方トゞ　為　領ぜ　あり　神　祓せ　ず　ば
星　如乃よ　うに　でり　のと　云　詞沢の　池な　社の　西　宮
猿沢の　池乃　うに　まい　へ　詞

春　雲山の　ふもと　中納　云　注　不　為　春の　祝　房の　弘なり
建　礼門　院　大原　入　御の　まへ　此　所
を　歌　書なり　吾妻　大原の　建　長谷の　観音
○　船　橋　院　此　小なり　俗　称　弘法の　西大師　神乃　俗　称
一　宮なり　○　神　願　院　山の　内　祭　弘法大師　世　のぐ　通　こと
西　よ　こと　注　為　く　書　し　法　書
り　十九　西右京の　大夫　為　兄の
の　法乃　夫　中　友　い　御　は　左　湯　俗　よ　住　世　通　和　ゐ　二　条
敷　九門　男　主　注　和　尚　已　天　主　と　いふ　人　なり　俗　宇　敷
院　御所　御　ふ　り　ふ　ん　せ　い　一　法　出　を　め　ど　通　ふ　主　俗　観　音
元　年　四　月　八　日　六　十　八　才　中　て　辛　せり

梶もむふらい津
かげの競る

えらろがうろ

銀閣寺

東山浄土寺村ヨリ数二十丁余

是利将軍八代義政公閑居の地にして東山殿と称す移宗を改め慈照院と号し給ふ方丈の東の小書院ありこれ同仁斎と号し給ふ世に棠の湯と呼ぶ是皆昔のまゝなり世に銀閣寺と号すれども実は観音殿なり又方丈の南庭池水の西より閣を流れ出なくそのまゝにして西山全閑寺へうつせるとかやこの閣の第一重を潮音閣と称し二重を心空殿と号づく第二重の額あり義政公の筆流石の名筆あそれくのさぶのとあり又東山時代とて世に秘蔵せり

○浄土寺の本堂の西の小院物寂いたる書院の傍なり

[illegible]

相国寺の方丈の南の庭は小川を流し一面に白砂を敷詰大小の石を立置き枯木枯竹を植添ひ枯山水の一式なり

方十丈の筆畫にして山水の趣大文字をそれ形人物の象より松が崎よりの遠景なりとそ

鹿ケ谷

なゝ方ゝ寺

船岡院の方丈和尚岡基を築ひいく時移りかはりて今は枯山水となれり

その他の朝鮮築山をあらひ石の数三百余の関白豊公の御建立の大二条関白殿の御成の間ありよし

ゑこういん塔頭の開山祖師の下の二男うち
俊寛
俗名
ひやいかう
僧寛俊初の山法
法印を初とし新大納言成
い式部乃至まで法印判官俊房
あいつまで皆
ちうを初として
い男子
ども
まことに
一大事乃所なり

入道そのうつ
生西
法和天皇乃御宇
刈大師
さーうぢ
とくいん
供養
ける
ぬ
附
とよとみ
四王の
像

東山神奈
乃外石
ハ六余
ぬ
ぬ
ぬ

之法そうそうして先祖代々の勅命を請ひ清浄の命をこひのひそ
め逝去の時分ちんまま受よりちひ〳〵ろ名そうなりあるを
たさよう上やぐて志如雲へ仰つけられうべ勅宣の
よし仰よおくびし朱の唐櫃よおさめ役僧をつけて後
京あり大内おて山形殿まへべとて封をうみのよ
不動明王まへ安置おくべろき役僧よ勤まへそを
おびくやとや時よ下部の者ハ勅のおりくひ〳〵かが
箱川の通ふ橋くありひよう〳〵やぐて志如雲よゆりて
山厨子の内納る通だりとけだごとく唐櫃おうりの
よ埋をやせだ数通あさうそひよという子除うそうて

祈祷おひへさよう仰出されそうり○毎年十月六日か十
六日まで十日ご召仏の法華講
徒囲の人数集して雲井よへ
居てすぢをなく分をうごう
ちひくの音楽をおよおよおよ
けださうとうそうそうおれだたく
うのくたよう

新黒岩

東山黒嶋
高弐百三十石

此数山の黒岩を宮よようつを
なりたりの方よ観音堂よ入の
ぬ松の熊谷よおひうけの松又海云指しそいおう〳〵無

こうくわいごこ
うそ
真っ向唐竹
うそ
きっそれかいさう
ろろろう

雲慶陰中門
天下無全の行狗
のくわん大事の山
まもれ法志
のそを通下山伏
おいまさうりを
ふりうりけ私いち
見ぐちふさ通しを
ふさふさふさ
ろろ
逃げ出す
そうろう

弓矢切りおてくけゝくよの石橋ゆてそ比おり
勢ゐ雲ハ不ゐ常会仏ゐり色ハ多光ゐ師の慕地
なりしゐ師ハ勢ゐ色ゐ濃のけちんなれでなゐくせ
ゐまゐよ無容おつりれる塔ありゐよおゐ二年ゐ塔
ハ文珠がうなりゐ和の初の文珠丹後の切ゐの文珠
ゐゐ平ゐゐと本朝ゐ三文珠とゐ○無者ゐ次ゐ空ハ
一の者共会我よおつりを対その後色をがくこのた移
うて生命とおゝくゝ世よいつり無容ゐよおりしゐ
伽ゐゐこ久下橙のゐ色光とお痛ありゝ久下い橙多書記
それおそ初軍へよ痛ゝくゝやゝ上ルゐよ初ゐと祀ハゐ
ゐり空実色と云会よおりひ西侍おそくゝ

切りて過去のいひて空ゐしゝが無会急ゐ後ゐいうぐと
初よのゐり法施よ人のまみとゐり心ゐ礼ゐ後世ね
ぐうゐ後元二年九月十四日八十三老中評定
雪渡院御門記
ひ変ゐよい無非橙現の社役の初共ゐまし夏ハ浄し
さを文ゐて橙人ゐゐ一新ゐ乃出門おゐ八まざくおゐ
くさうれ法初うゐ今ゐ御門弘ハ二年寺の知識大師
ゐ八代目ゐ近さゐのゐしゐ空入ありざゐゐのゐ
やくさゐ後ゐよくたり先一義ゐ御ゐ所ゐれ今対の
くくさ第ゐざくさだハ空ゐ乃御笑大ゐ
さうゐゐゐ歩引出後二初ゐよりゐびて教石人ゐ年所

年一八十二人に先立つ
まず名門へ預令申て
その令員三方へ割り
為王の権予れ加那流を
光院武義の王義院奥列
水戸の二海乃法中おいて
さの宝徳院かなへのもよう
為文坊上此より大光院後おの小路よそん流後中よ
松平院より後の勇光坊武列よおそ陰かさ今武坊
とてあり為若衆ざやよ私乃そ
大方十文字よ
おのりて奥をふせて此仕
おもむのとりだうまりよざ
く新ざ也奥列浮生の坊が
ら一為それど此度二度の生
三ツ割いわりて此体を守
乃此通為都よ四日吉此
おざて一日十六日より沢川
文ありよ七月の此そうも
ざざら十七日よさうへ支今大
文武天皇乃此号志敬修
新観雲

ゟり或時永観沙石会弘つ〇ゟ時成卿の方ゟ
もぐらくもちをつゝみ紙ニ而ゟ
ゟ而ゟ永観もそしと易ゟ
ず東世乃衆生ゟもぐらにもが
と詠ゟ世給ゟ事ゟくやくあり
また永観ゟ
代光山の流乃ゟ源観僧都
乃出宅南都東大寺乃勧
北ゟ閑居一往生十因の書
一月二日八十七ゟ
ト安全の形状ゟ

大納言教忠の一子勝遍僧都
ゟ而修行ゟ

南禅寺

春山法皇乃出家寺普門禅師
学一ゟ
ゟ時ゟ中ゟ
なく掃ゟ
ゟ禅師ゟ
と詠ゟ号ゟ
だゟ
ゟ禅師ゟ

太閤秀吉公
あつ出来
いこざり
まいろ

あつ出来
かるそうな
分やきつくめと
あげるそうな

東福寺建仁寺万寿寺の四箇寺おなじ
海のまこと四うそそみ山乃よこ
雪よみつの山ありて春ありて
五こ年多中也花そうこ
海のもこと四うすくらべんよ
乃内少て春深なりそれよりそう
とうこう落訳の内こ寺夜の
とこ又ひんかっとう事ありた
元ニ花を西堂とうこうこ
中央こうこう方ま
発なりひこうこ天ま

うこうこと春と金こうこ
陰陽和合有よひこを天みた
書蓮流御門記
清盛の天皇より仰ぎ傾奢大師の開基元三大師堂ありひ
堂の下の方八金苑ありとて庚申の社あり庚申待の事人生
四十二代文武天皇の御宇大宝元年辛酉の年より初て大坂の
天王ありてもこうひ待よ申ハみ様ざろこう猿とて三つの猿を立る社ありつ
もうの人申の日ハ猿の形を人の形ニ様よ
たとへそ男のいまし女を形ちこよありこ世のうごうひおこ
つと男と女ハ夫婦ニよこ寿る事ハ

しまうると云事を歎しかうちゃんの若そう
みーるひ権現の封よあくうてをみせられてねとくよめる
夜移どーて東とゆうとなりまをもうぞーて世のくうう
さ浴世話ろうさ小神と指よくて十二明洗米をを
なへ福をを祈いもろくなりり愛申まちどる事い三戸
乃神とそ人の身内よ若恩独んぐひ取天の三神の昇り
天尊の文よ取うう西へ降ふうのとが大なれど十二を
の命をうぢひふれど六十日の命をうぐひあくよ取ふ孫
ぐ若ハ庚申指をふる事へ松の門おくうりとけて要
日ハ八坂うちんよ手落おびさ
智恩院

吹独院のちう建暦元申建之帝光大師黒谷出
給ひて開居をふめ称世わりしおれど事流のとが
ら宿縁基尊の異地なりり称大師へ異地の宝久業
の前業いおとう凡人なりを母うくをのひとみてうさ
る多へて若第二十日午の四月七日子男子誕生給ひ
雲天よたなびき白ふ二流うぐり在る様の
末よかる七夜を西て天よの祝ふ誕生末と
なりけ仲間をて今よありて同ふ笑
指寺の勧学ひりへをーう文ありしが一を実てたと
さとう学性のの流ふここうひ人田本よりく人よあう
ぞくろいさんの西諸小若源光えのりへをーの人源光えん

又は四義をうづくまるの句の一ふし天台のふう
こ弾義なり我流なりて書ふへきりひくずと切
法院の御室利皇子のしゆ繁昌りて大宗藏
とうけて一乙三教の妙理をみづくがごとく奥書を又
辨しおひまち西塔巻頭坊へ入りて仏法の極意を学
て一切経文をへんくりおひ仏経文をそへ事世思智の九史
切をちぐくとそ奥伝得給の性空要集善導和尚の
釈よりて法ごく義あり幸宇治の会に一向
専念の会伸しひろめへだ山門の衣徒を悩ん矢
系かそんざいしりしど皆ご理よう浄土の宗門日々ひ
ろまり時に建久二年八月廿五日法院のごとくなりて
迂ありしを好物許あり御系一条山に閑居し給ふ
八十才建暦二年正月廿六日逝去あり西法院のごとく拠
坊ちひろ浄土安んの勢ひ事のごとく拠
云ふまでもひろく毎年正月廿六日に一枚起請と
大法事ありて浄土一宗ふへおつとびとけて日々落中
浴衣のまるあつまりひしくそうちおとなひ系行のたくみの
へ悪事のことひらんどやうりあり給よね
ごひそへ被浄土よ中ふんとひたまふ一句候ふ
大師御廟の北うひ百ふ尝光
五

円裏雑巻之一終

国立公文書館
National Archives of Japan